

ダルクの基本プログラムと現状

東京ダルク 山口哲哉

Drug Addiction Rehabilitation Center DARC

- ◆ 1985年東京荒川区に開設(現在の東京ダルク)
 - ◆ 仲間と共同生活をしながら自助グループに通う
 - ◆ 一人の依存症者は他の依存症者の助けになる
(One Addict Helping Another)
- ロイ神父と近藤恒夫の出会い
- ◆ 薬物依存症者も回復のために必要な「場」「仲間」「12ステップ」があれば・・・



ダルクの基本的なプログラム

- ◆ 12ステップを元にしたグループミーティング

一日1～2回ダルク内で行われる

- ◆ NA (Narcotics Anonymous)に参加

夜は各地で行われているNAミーティングに参加

- ◆ 共同生活(入寮・通所)

基本的には自主管理・生活訓練

- ◆ スポーツ・レクリエーション・その他

それぞれの施設で独自のプログラムを取り入れている

- ◆ 回復者によって運営されている

ダルクプログラムの回復者によって開設運営されている

利用者(28名)の断薬期間(クリーンタイム)

◆ 6ヶ月未満	13名
◆ 6ヶ月～1年未満	3名
◆ 3年未満	2名
◆ 5年以上	10名

必ずしも利用(入寮)期間とは一致しない

利用者の逮捕歴・入院歴他

- ◆ 逮捕・補導歴 72.1%
 - ◆ 刑務所経験者 38.4% 2、3回(35.7%)
 - ・少年院18.4% ・少年鑑別所27.4% ・拘置所55.1%
 - ◆ 暴力団との関わり（自分や身近な人が暴力団関係者だった） 68.6%
-
- ◆ 精神科入院経験 80.3%
 - ◆ 精神科受診 89.9%
-
- ◆ 現在精神科通院 68.3%
 - ◆ 現在服薬 55.1%
-
- ◆ 手帳取得 22.7% 1級3% 2級50.5% 3級35.6%
 - ◆ 障害者自立支援法を利用 61.8%

利用者の最終学歴と就労経験

- ◆ 中学卒業 16.0%
 - ◆ 高校卒業 31.5%
 - ◆ 専門学校卒業 14.0%
 - ◆ 大学卒業 11.0%
-

- ◆ 現状で仕事を持っていない 79.8%
- ◆ これまで全く仕事をしたことがない 17.3%
- ◆ 就労年数の通算は、5から10年とが最も多く、26.6%
- ◆ 職場は5から10回変えたという者が42.6%であった。
- ◆ 長期間の労働していても不安定な就労経験しかない者が多いと言える。

ケース事例56歳(薬物:覚せい剤、アルコール、有機溶剤)

- ◆ 2006年11月ダルクに通所。12月から入寮生活が始まった。ミーティングを中心に午前、午後のプログラム、そして夜は自助会(NA)ミーティング参加とスリーミーティングの毎日過ごす。
- ◆ 仲間達のサポートを受けながら仲間との関係性と薬を止めていく事は比例している事も学びながら一度も再使用しないで毎日を過ごしていた。(アディクションを抱えている仲間たちは関係性の病がある事も学ぶ)。
- ◆ 2008年10月円満退寮。(生活状況:生活保護受給しながら、アルバイトして一人暮らしがスタート)。
- ◆ 2011年に再就職。生活保護も廃止し、結婚して順風満帆な生活をおくる。
- ◆ 同年9月、結婚して間もなく原因不明の全身痙攣をおこし、仕事に行けなくなり精神科を受診したところ、うつ病と診断。
- ◆ 同年10月より改めて東京ダルクに通所(治療)が始まる(約2年半)。
- ◆ 2013年4月よりうつ病が軽減し東京ダルクスタッフとして働き始める。
- ◆ 2025年現在に至るまで10年以上スタッフを続けている(クリーンタイムは現在19年)。

考察(変化の要因)

- ◆ 薬の再使用は一度もないが精神的なアディクションを疎かにすると何かしらの弊害がおこる(職場でのパワハラ、彼女との関係性等)。
- ◆ うつ病になってからダルクのプログラムと精神科に通院しカウンセリングそして、毎日自助会(NA)に通い自分の問題を徹底的にみつめ直した。
- ◆ 目に見える目標(ダルク退寮、生活保護の廃止、結婚)はすべてクリアしたが、アディクションのメンテナンスを続けていく必要がある。
- ◆ ダルクのスタッフとして、当事者が当事者を助けていく(ピアサポート)事の重要性を改めて実感。